

去る3月2日(土) 15:00より、地域活性化の一助として上田市内中央の浄楽寺本堂にて、私を含め、上小地区在住のプロフェッショナル並びにアマチュアのコンボによるジャズライブが開催され、120名強の聴衆に聞いていただき盛り上がりました。

浄楽寺に於けるライブは、二度目であり、前回(90名)よりも参加者が多かったことに、いささか驚きつつも、嬉しく想いました。

今回のライブは、信濃毎日新聞の取材を受け、3月3日の東北信版に掲載されたので、その記事の写しを下にに掲載します。尚、次回の開催予定は来年、2014年4月12日(土)です。

毎日新聞 2013年(平成25年)3月3日

本尊前でジャズの調べ

上田の浄楽寺でコンサート



上田市内中央の浄楽寺(滋野真住職)は2日、市内のプロやアマチュアによるジャズコンサートを本堂で開いた。写真。檀家や近くの住民ら100人ほどが、普段とは違う雰囲気の中で生演奏を楽しんだ。

安置されている本尊の前で、同市中央3の歯科医、布施修一郎さんら4人がサクソフーン、コントラバス、キーボード、ドラムを演奏。市内でジャズボーカルを指導している同市御所の堀内実智代さんが「オール・オブ・ミー」「星に願いを」などを歌い、聴衆は体でリズムを刻んだり、大きな拍手を送ったりした。

金色に光る装飾や仏具に囲まれ、堀内さんは「普段は薄暗い場所で歌うことが多いけれど、今日は明るいので化粧のりが良過ぎるのが分かるかも」と語り、会場の笑いを誘った。

浄楽寺は、「地域に開かれた寺にしたい」と10年ほど前から年2回、医療講演会やバイオリンコンサート、一人芝居などを無料で主催しており、ジャズライブは2011年12月に続き2回目。滋野住職は「アマチュアの発表会場としても広く使ってもらい、もっと親しみやすい寺にしていきたい」と話していた。

一方、地方都市中心部の空洞化が言われ始めてから久しいのですが、上田市の場合も御多分に洩れず同様です。学生時代からジャズ演奏に親しんできた私は、毎週末の土曜日 18:30より松尾町の「フードセンター」又は、原町の「新感性りんご」に於ける、街角ジャズコーナーに月1回は出演しています。このイベントは、演奏メンバーの一人片桐秀樹君(上田高校85期卒、丸子町在住、ギタリスト)をコーディネーターとして、2011年9月より開催し続けています。この行動が、土曜日の夜だというのに閑散としている街中の賑わいへの一助となってくればとメンバー(ジャズ演奏者)は願っています。

最近は、このような動きをマスコミが取り上げてくれ、昨年12月に信濃毎日新聞の東北信版に写真(次ページ)が載りました。尚、上田市内中心部でのジャズライブ活動の状況報告は、この4月より簡単なHPのような形でネットにアップしています。 <http://music.geocities.yahoo.co.jp/gl/uribashiyunin>

また、常連客の女性から有難いメールを戴いていますので、以下に記します。

「商店街の行く末を心配し力になりたいと願いを込め、頑張っている皆さんを見て私も元気を貰っています。10年程前にラジオで聞きました。少子高齢化に人口減少社会、若年者を取り巻く労働環境の悪化等、いずれ皆が一人一台の車を所有出来なくなる時代が来るそうです。そうなった時、歩いて行かれる地域の商店街が必要になる&見直されるそうです。

商店街にお客さんを呼び込もうと努力している姿が素晴らしいです。何年か、何十年か後に『あの時皆さんみために頑張ってくれる人達がいて良かった』と思える時代が来ると信じています。」

「継続は力なり」になるよう、気持ちを含めて、上記のような活動を今後も続けて行く意気込みであります。尚、街角ライブ、ジャズコーナーの演奏は、YouTube mjc3625 にアップしています。

再考 再興

上田のまちづくり

第7部 市民みんなの手で ①

に縁はなく、実際に暮らして務める。年明けには毎月第3日曜の昼時にカフェで「茶話会」を開き、ランチを食べながら手伝えることにはなから希望者に自由に語り合いか」と思っていた時に知人も声を掛かり、9月のカフェオープン時からスタッフを

官民で支援・PRに力を

場所としてはまだ不十分だ。

人口が上田より6千人ほど少ない約15万2千人の栃木県足利市。中心市街地にある「友愛会館」には、市民や観光客らが年間12万人以上も訪れる。足利銀行(本店・宇

一方、「歴史と伝統がある中心部を衰えさせてはいけない」との声が強まり、同商議

所は旧市街地の真ん中にある足利銀行旧本店を買収し、旧市街地には映画館がないため、35mmフィルム映写機を使って月1回、「ローマ」

休日や「タイタニック」など名作の上映会を続ける。市民ギャラリーは1週間ごとの入れ替え制。本格的な照明設備や建物の重厚な雰囲気がある。数カ月先まで予約埋まっている。原則として休館

日はなく、いつ行っても何かやっているのが魅力だ。友愛会館開設時の事業費は約6億3千万円。このうち国、県、市から中心市街地活性化事業として補助金計1億7千万円余を受けた。同商議所の

漆原宏志総務課長(57)は「官民で総力を挙げて取り組み、街のシンボリックな存在になっている」と話す。

上田市中心部では、松尾町フードサロン以外にも拠点になり得る場所はある。海野町商店街では市が休憩施設「ふれあいサロン」を設け、同商店街振興組合は海野町会館1階ホールに乳幼児向け遊具を用意。それぞれ無料開放している。上田商工会議所や市などが出資する第三セクターのまちづくり会社「まちづくり

上田」は、原町にある池波正太郎真田太平記館の一角で喫茶店を運営している。だが、いずれも多くの市民を引き付けることはできていない。中途半端な内容や規模で街などに拠点も設けても、にぎわいは取り戻せない。どこを「名物拠点」にするかを明確にし、商店街、商議所などができる限り、

活用して開設。物販では地元産の野菜、パンなどを扱う。毎週土曜午後6時半からは、組合が地元バンドなどの無料ジャズコンサートを開催。22日もキタローやサクスの3人が演奏した。

だが、来店客は月平均で3千4百人にとどまる。市中心部に人が集う「核」になる



松尾町フードサロンで毎週土曜夜に開かれていたジャズコンサート=22日



足利銀行旧本店を活用している足利商工会議所「友愛会館」=足利市通3丁目

第三種郵便物認可

上田市の中心部に活気を取り戻すには、市民の足が自然と向き、商業者が新しいことを始めたいくなるような環境を早急に整えなければならぬ。最終シリーズの第7部は、市民が知恵を絞る、力を合わせて具体策を打ち出す大切さを提言したい。

(伊東 愛美)

提言 「名物拠点」をつくらう

上田市の中心部近く、食料品などを販売している松尾町フードサロン内にある喫茶コーナー「たね晴カフェ」で木曜日の昼すぎ、4人の女性客が紅茶を飲みながら歓談していた。「すっきり寒くなってきたね」。時折、4人に笑顔で声を掛けたのは、毎週木曜を担当するスタッフの野川啓子さん(64)だ。野川さんは、定年退職した夫と一緒に6年前、農業ができる環境が気に入る同市手塚に千葉県から移住した。上田